

WEDGE 5

2011 ウェッジ 400yen

「想定外」を生き抜く力

津波と原発 対応の差を生んだ訓練

小中学生の生存率99.8%は奇跡じゃない





につぼんの1000人の青年 46

海外の子どもを支援 黒帯で行動派のNPO代表

横田宗さん

(NPO法人アクション代表)

海外の子どもたちの生活を支援するために
可能な限り活動資金を自前で調達し
ウェディング業界や美容業界と提携するなど
ユニークな活動を展開するNPOがある。
設立者は、好奇心からボランティア活動を始め
英語が不自由でも被災地に駆けつけた行動派だ。

林えり子 作家

写真・田中まこと



遊びに来た中学生にエコミスモを紹介する。

捨てられていたお菓子の袋をポーチやペンシルケースにリサイクル、その作業そのものがフリーピンの貧困地区の人々の生活支援になるという、じつにユニークなボランティア事業「エコミスモ」を起ちあげたのが、横田宗さんである。NPO「アクション」の代表者として児童養護施設運営の支援、盲ろう学校支援、奨学金プロジェクト、自身が極真空手の黒帯という特技を活かしての武道による青少年育成事業など、活動範囲はものすごく広い。

なされてない駅構内や歩道状況の大きな変さを覚悟してまで街中にやってくる理由はいったい何か、少年の素朴な疑問がこの道に分け入る出発点であった。ふつう、「なぜ」と思っても答えを探るまでにはいたらず棚の上に抛りっぱなしにしがちだが、横田少年は違った。忘れずに頭の隅に置いていた。といって世にいうところの勉強家少年ではなかった。ご本人曰く「勉強なんて大嫌い、それに出来がすごく悪い子」、吃音症のうえ落ち着きがない。小学校4年生まで担任の先生の隣に座らされていた問題子だった。その子がいまや、フリーピンの貧しい子どもたちの救世主といわれる青年である。アンデルセンの『醜い家鴨の子』を聞くようだが、彼の白鳥としての資質は疑問を忘れずにいる粘り強さと探究心。だから、少年の目に焼きついた疑問を解くために、高校生になると東京郊外にある障害者施設まで赴くのだ。

梅檀は双葉より芳しというが、発芽の香りを嗅ぎつける人がいて上手に育ててくれなければ梅檀だって枯れ木になろう。少年の双葉を摘むことなく彼の資質を伸ばした人が、やはりいた。宗君のお母さんである。彼に内在する固い素質みたいなものを見てとっていたのだらう、「ブラブラしてるといなら、参加してみれば」と、東京都

の広報誌に掲載された「4泊5日で障害者サポートボランティア募集」の記事を見せたのだ。

高校1年生は眼を輝かして施設へ向かった。横田青年がいまあるのは、この母のお陰、勉強を強いるだけが母の愛情ではないことを私たちは考えしておくべきだろう。

火山噴火のニュースを聞き英語が話せないのにフリーピンへ飛ぶ

長年の「なぜ」は解けた。身障者の人たちが街中へ恥ずかしさや道行く人たちへの迷惑を思いながらも車椅子で

出かけるのは自身でしなくてはならない所用や買物があるためであり、世間との接触を欲ししたことだった。そうと分かると少年にだって男っ気はある、だった僕が肩代わり、彼らの手となり足となるうと、施設に定期的に通いだし、内職の手伝いから掃除、髭剃り、切望やまなかつたデイズニード行きと奉仕活動をはじめののだ。高校3年になった1991年、飛び込んできたのがフリーピン・ピナトゥボ火山の噴火、近くにある児童養護施設ジャイラホームの施設が半壊とのニ



都内美容室や百貨店で、数千円前後で販売。

ユース。施設の崩壊が即座に子どもたちの命を脅かすことを、身障者施設で働いた身であればすぐわかる。居ても立っても居られず、奉仕活動のいろはを体得していれば力になれると単身自立。しかし、マニラ空港で立ち往生する。

ピナトゥボへの交通手段がないのだ。現地語も英語もできないから行く手だてを聞くこともかなわず、だが、ひるんでなんかない。とことと未知の国の知らない道を歩み出す。そんな日本若者に現地の人々はやさしかった。助言助力を惜しまずに道順を教えた。長旅の末、ようやく児童養護施設に着。被災の深刻さに胸がつぶれた。1カ月間の奉仕活動、しかし1人の力の限界を思い知り、帰国後にボランティア団体アクションを設立、同志を集めて再度彼の地へ渡って施設修復事業に

本格的に取り組んだ。

ボランティアの語源はラテン語のVOLVOで志願者を意味し、十字軍などでは志願兵をボランティアと呼び現在も志願兵義勇兵を指す。兵役のない日本でも、自発的な奉仕活動としてつかわれ、ボランティア元年といわれるのが95年の阪神淡路大震災。

その6年前のサンフランシスコ地震に38名の大学生が呼びかけに応じて被災地に赴き人道支援をしたのが「日本初」とされ、日本人がボランティア精神に目覚めるのは、つい最近のようにいわれるが、地震国であれば互助精神で難局を乗り越えてきたとの想像はたやすく、事実、江戸時代には「鯨講」という助け合いの講中が市民レベルで組織されていた。

江戸御府内を例にとれば、武家町人農民職人を問わず誰もがなんらかの講に加わり、講にしても観音信仰やお遍路、俳句川柳の趣味やオランダ語習得、そして天災に立ち向かう互助とさまざまである。私自身の経験でいえば、村莊がある信州の集落に「三夜講」という互助組織があつて、地縁のない私に



アフリカで空手を教えたほどの腕前だ。

まで参加を勧められたものだ。通夜葬式にまつわる煩雑な作業の一切合切を、親戚縁者の手を煩わせずに、隣近所の衆が担うという仕組みは江戸時代からのものである。

既成の価値観に縛られず ボランティア活動の 新しい姿をつくる

98年3月に「特定非営利活動促進法」が成立、「NPO」として市民が自由に営利目的でない社会貢献活動が税制の優遇を受けてできるようになって、日本のボランティアは組織立った活動ができるようになった。ちょうどそのころ、横田さんは亜細亜大学の学生で就職活動の最中だった。

勉強大嫌いの劣等生が大学進学できたのは同大学が「一芸一能入試」を採用したのに「運よくすべり込んだ」。

国際ボランティア事業が支える運営

横田さんが代表を務めるアクションは、海外の支援活動の現場を視察する「スタディツアー」や、実際にボランティアワークを行う「ワークキャンプ」による事業収入で、寄付だけに頼らない仕組みをつくりあげている。スタディツアーの期間は数日間から1週間程度、マニラ最大のゴミ山や、児童養護施設・盲ろう学校を視察し、ストリートチルドレンを支援するNGOスタッフの自宅にホームステイする。ワークキャンプは、1週間から数週間と長い間現地に滞在し、子どもや現地の人が使用する施設などの建築作業を行う内容となっている。いずれも専門的な知識やスキルは必要なく、日本人専任スタッフが現地で付き添い、治安対策のアドバイスも行う。これまで、約2400人が参加したという。

ツアーの参加費用の一部は、現地の活動を支える資金やアクションの活動資金に利用される。2009年度の事業報告書では「国際ボランティア体験事業」による収入は約2500万円。寄付金収入の10倍近い額となっており、他のNPOと比較しても際立った特徴といえそうだ。

ボランティア活動が認められたのだ。

その成功例が菓子袋のリサイクル事業。マニラの貧困地域に金銭の寄付を与えるのではなく、子どもの物売りに生計を頼る母親たちを経済的に自立支援して子どもたちを学校へ戻す。児童養護施設には空手道場をつくって規律礼儀などを身につけてもらう。現地の派遣スタッフが有償で活動できるのはエコミスマの売り上げがあるからだ。

在学中はフィリピンに続いてインド、ルーマニア、休学するとアフリカは内戦後ルワンダ、ケニア、ウガンダ、ザイルなどで戦災孤児支援活動、4年生になるとフィリピンのストリートチルドレン救済のためフィリピン事務局と日本事務局を開設した。

いま、横田さんはボランティア事業化による新しい職種の開拓に挑戦している。彼のような若い人材がいるかぎり、日本の再生は夢ではない。

職時期がぶつかった。社会人になればマニラの街頭で物を売り歩く教育も受けられない子どもたちを助け続けることは難しい。しかし企業人となつてこれまでわがままを許してくれた親たちを安心させたくもあつた。煩悶の末、入社したい一社を決めて試験に臨んだ。

結果は幸か不幸か、不採用。これで

腹が据わった。しがらみから吹っ切れた解放感があつたようで、そうなるエネルギー全開である。武蔵野市に事務所を開設、長年の課題であった「寄付や募金に頼らない経済的に自立したNPO法人」を目指して動き出した。職員の給料の保証、活動費は自らの仕事によって捻出する、というボランティア組

〔はやし・えりこ〕作家。著書に『清朝十四王女川島芳子の生涯』（ウェッジ文庫）や『暮しの昭和誌』（海電社）、『江戸・東京通物語』（ソフトバンククリエイティブ）等がある。